

東北・北陸地域に適するタマネギの春まき夏どり作型

厳しい越冬条件等により慣行の秋まきの生産性が低かった東北・北陸地域においても、春まきで安定的な栽培が可能

研究開発の背景

- ・タマネギは輸入のシェアが多く、また、国産タマネギの端境期である7、8月に加工・業務用向けの需要が高まる。
 - ・他方、新規産地を見込める東北・北陸地域は、厳しい越冬条件等により慣行の秋まき作型での生産性が低い。
 - ・そこで、これらの問題を解決するため、7、8月の加工・業務用向けを念頭に東北・北陸地域での春まき夏どり作型を開発した。

研究成果の内容

タマネギ栽培の慣行作型で生産性が低い地域でも、安定生産を可能とする栽培方法

適期に適切な品種を播種

- ・「オーロラ」「ネオアース」「もみじ3号」等、地域の気候にあった秋まき中生～晩生品種を選択
 - ・晩生の品種ほど、遅まきによる減収は少ない
 - ・2月中に播種し水稻育苗ハウス等で育苗、4月に定植して、端境期となる7、8月に収穫

緻密な病害虫防除

- ・高温多湿下の栽培のため、ネギアザミウマ等の虫害、りん片腐敗病等細菌性病害の発生が多い
 - ・排水対策の徹底、定期的な薬剤散布による防除が重要。雑草には土壤処理剤の体系処理が有効

秋冬野菜との輪作体系

- ・在園期間が3か月と短く、8月中には次の作付が可能となるため、ブロッコリーやキャベツ等の秋冬野菜との輪作が可能

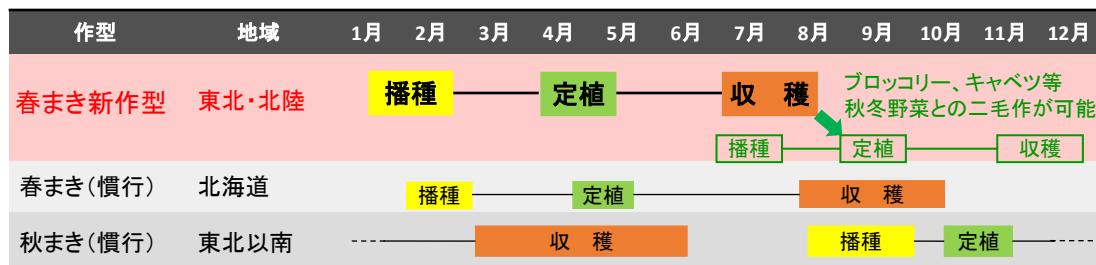


図 タマネギの慣行作型と開発した東北・北陸向け春まき作型との比較

期待される効果

- ・新規産地が増えることで、大産地の不作時の危険分散となり、また輸入からのシェア奪還が進む。
 - ・端境期生産により加工・業務向けが安定的に供給される。

開発機関: 農研機構東北農業研究センター、岩手県、山形県、富山県、弘前大学、予算区分【競争的資金】

国産タマネギの生産量の増加・安定供給に貢献

- 7～8月の端境期に収穫が可能
⇒ 有利販売が望める
 - 当該地域の秋まきと比較して
収量倍増(2t/10a→4～5t/10a)
 - 8月には次の作付けが可能
⇒ 秋冬野菜との輪作が可能
 - 育苗ハウスの共用、作業分散
⇒ 水田農業とも相性良い



農林水産省 園芸作物課のコメント

本作型は、加工・業務用向けのタマネギの周年安定供給に資するもので、実需者ニーズも高いと考えられます。導入に当たっては、ニーズを適切に把握するために、実需者とのマッチングセミナー等へ参加されることをオススメします。

導入をおすすめする地域

東北および北陸地域、北関東・信越地方の
冷涼地など